

あたりまえという名の奇跡

オホーツク地区 美幌町立北中学校 3年 田元 克

「ただいま」「おかえり」「今日はどうだった？」家に帰れば、家族と交わせる何気ない会話。みなさんは、こんなにも平和な毎日を、「あたりまえ」だと思ってはいないだろうか。

人は、「こうしたい」「ああしたい」と理想を求め、その理想が叶わなかった時には、「もう嫌だ」「死にたい」などという言葉簡単に発してしまう。

「ちょっと言ってみただけ」「本心じゃないし」と思う人もいるだろう。けれど生きてくても生きられない人が、この世界には何万人といる。そして、その人を必死に支えている人たちもいるのだ。

確かに生きることが苦痛だと思う時は、生きていれば幾度となくある。でも、自分以外の人たちに思いを馳せる時、生きることと必死に向き合ってる人、「死にたい」という言葉を聞いた人たちの思いを考えた時に、そのような言葉が本当に言えるのだろうか。

二〇一七年六月二十二日、歌舞伎俳優、市川海老蔵さんの妻で、フリーアナウンサーの小林麻央さんが亡くなった。彼女は「力強く人生を歩んだ女性でありたいから、子どもたちにとって強い母でありたいから、病気の陰に隠れている自分とお別れしよう」という思いから、進行性の乳がんであることを告白し、どんなにつらくても、日々様子をブログに綴った。強い思いで始めたブログは一日も絶やさず、懸命に上げ続けた。そこには、「あたりまえではなく、生きている一日一日を大切にしよう」という彼女の思いがあったのだと思う。

僕の母も、つい数か月前まで入院生活を送っていた。昨年の四月、突然体調が悪くなり入院することになった。それから、僕の「あたりまえ」は一変した。

普段、帰れば聞こえてくるはずの「おかえり」が聞こえなくなった。お腹が空いたら、「今日のご飯、何?」、学校で何か嫌なことがあったら、「今日学校でさ・・・」などと相談できた「あたりまえ」が消えた。

かけがえのない人が、突然、自分の日常からいなくなる、それだけで、僕の日常は、非日常へと変わったのだ。

それから母が入院していた一年間、僕はずっと「日常とは何か」「あたりまえとは何か」ということを考えていた。

たぶん、「あたりまえ」とは、本来の姿ではないのだ。そしてそれは、小さな小さな奇跡の組み合わせでできているものなのだ、と実感した。

「あたりまえ」の対極にある言葉は、「ありがとう」だと聞いた事がある。

あなたのあたりまえの毎日も、何かが一つでも欠けた瞬間、それは「あたりまえ」ではなくなる。人は、あり得ないことが起こった時だけが「奇跡」だと思ってしまうが、それは違う。いつも私たちのそばで、今この瞬間も起きているのだ。奇跡だからこそ、「有り難い」のであり、「ありがとう」という思いが沸き起こるのだと思う。

僕は、この主張を聞いてくださった方々に、毎日ではなくても、何かの折にふと、あたりまえの日常があることに「感謝」をし、「ありがとう」の思いを感じるきっかけになってもらえればと思う。

「あたりまえ」という奇跡と、感謝の思い、「ありがとう」を、感じながら、僕は一日、一瞬をしっかりと生きていきたい。